



Title	命令条件構文の通時的変化と制約の関連性：多義性の解消という観点から
Author(s)	瀬戸, 義隆
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/69952">https://doi.org/10.18910/69952</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 命令条件構文の通時的变化と制約の関連性 -多義性の解消という観点から-

瀬戸義隆

## 1 はじめに

日本語において条件構文は記述が盛んに進められている言語現象の一つであり、その振る舞いに関してこれまでに多くの考察がなされてきた。日本語において特に盛んに進められてきた考察の一つとして「ば」「たら」「なら」「と」という接続助詞が条件構文内に含まれる場合、それらの条件構文がどのように振る舞いを異にするのかという問題が挙げられる。その中でも「ば」と「たら」は非常に類似した振る舞いを示すことが多いが、現代日本語に関する記述的研究の中で観察された大きな違いの一つに、「ば」を含む条件構文には「たら」を含む条件構文には見られない使用上の制約があるという点が挙げられる。次の例はそのような制約が見られる具体例の一つである。

- (1)a. ??学校に行けば、先生に挨拶をしなさい。  
b. 学校に行ったら、先生に挨拶をしなさい。

(1a)と(1b)をいずれも、「学校に行く」という従属節で表される事態が実現した場合を仮定しており、その際には「先生に挨拶をする」という行動をとるようにと聞き手に指示を与えることを意図された文としよう。すると(1a)のように「ば」を含む文の場合はその容認性が低くなり、「たら」の場合にはその容認性に問題はない。「ば」と「たら」を含む複文が頻繁に類似した意味を表すことが多いが、(1ab)に示されるような振る舞いの違いはそれぞれの接続助詞が示す機能の違いを反映する振る舞いを反映したものとして捉えることが可能である。本考察ではこのような振る舞いの違いは本来、「ば」を基盤として成立してきた条件構文内に通時的に生じた構文変化によって生じたものであり、その背景には従属節における多義性の解消という機能的な側面に関わる動機付けが関与していたことを論じる。

本考察の構成は次の通りである。第一節では通時的な条件構文を考察するにあたって枠組みとなる構文変化・構文化 (Traugott and Trousdale 2013)について概観する。第二節では本考察における命令条件構文を定義し、第三節では古典日本語と現代日本語における命令条件構文の性質を概観すると共に、その二つの間に見られる相違点を検討し、そこから命令条件構文に生じた変化を検討すると共に、そのような変化の背景には多義性の解消という動機付けが存在していたこと、その変化に伴う結果として「ば」を含む特定の条件構文ネットワーク内に制約が生じ、結果として現代日本語に見られるような制約が生じたことを述べる。第四節では結論を述べる。

## 2 構文変化と構文化

本節では通時的な構文の変化を考察する際の枠組みとして構文変化と構文化に関して概観する。構文という言葉は様々な意味で用いられるが、本研究で用いる構文は形式と意味から成立する一つの単位を指し、形態素・語・句・文など様々な複雑性を示す要素を指すと共に構文間にはネットワークが存在しており、そのようなネットワークの総和を言語話者の言語知識の総体として考える(e.g. Goldberg 1995, 2006)。また、そのような構文のネットワーク内には全ての要素が具体的な要素で占められている構文もあれば、抽象度の高い性質を示す要素によって占められる構文も存在する。このような構文の考察については共時的な観点からなされるものが中心的であったが、近年では言語変化を構文の変化と捉えるアプローチも見られる。構文変化と構文化 (Traugott and Trousdale 2013)という考え方はその一例として挙げられる。

構文変化 (constructional change)と構文化 (constructionalization)とはいずれも特定の構文に生じる変化を指す。構文変化とは構文における形式もしくは意味・機能のいずれかに関わる変化を指し、構文化は形式と意味・機能双方に関する変化を特定の構文が経験し、新しい構文として成立することを指す。

Traugott and Trousdale (2013:1)は前者の例として、助動詞 *will* に関する意図から未来への意味変化と *will* から *'ll* への形態音韻変化を挙げている。この場合、*will*/*'ll* のいずれでも意図と未来の意味を示すことが出来るため、この二つの間に形式的な違いはあれども、意味に関する違いは見られない。

それに対して構文化の場合には、既に存在している構文とは異なった形式と意味によって構成される新たな構文が生じることとなる。Traugott and Trousdale (2013:25)はその一つとして *a lot of a N* という構文の変化と新しい構文の発生を例示している。この例は、元来、*N* として示される特定の名詞が表す概念全体のうち、その一部が一つの単位を構成するという意味を表し、統語的には *a lot* という要素が主要部に相当し、*of N* という要素が修飾要素として位置付けられる。このことは次のような例によって示される。

- (2) the worthy Mr. Skeggs is busy and bright, for **a lot of goods** is to be fitted out for auction. (1852 Stowe, *Uncle Tom's Cabin* [COHA], Traugott and Trousdale (2013:25)より引用)

この例では、名詞句の *a lot of goods* に対応した be 動詞として *is* が用いられており、この名詞句における主要部は *a lot* という部分が相当し、*of goods* という部分は修飾要素として機能していると判断可能である。それに対して次の用例の場合は異なる振る舞いが見られる。

- (3) I have **a lot of goods** to sell, and you wish to purchase **them**. (1852 Arthur, *True Riches* [COHA], Traugott and Trousdale (2013:25)より引用)

ここでは, *a lot of goods* に対応する代名詞として複数を表す *them* が用いられていることから, この名詞句の主要部は *goods* に対応しており, *a lot of* という部分は量を表す修飾要素として機能していると判断出来る。この二つの例を比較すると *a lot of N* という形から成立する名詞句は形式と意味における変化を経験していることが分かる。形式的側面としては主要部が *a lot* という要素から *N* に, 修飾部が *of N* という部分から *a lot of* へと変化している。また, 意味的側面として「N の一部」という意味から「多くの N」という意味へと変化が見られる。このように元々の構文 (i.e. (2)) 意味と形式とは異なる要素(i.e. (3))が成立していることからここでは新しい構文が成立しているということになり, このような変化を Traugott and Trousdale は構文化と読んでいる。

このような構文化が生じるにあたっては, 多くの場合において構文変化が繰り返し起こることが多い。このような構文変化は前構文化変化(pre-constructionalization constructional changes; PreCxzn CCs)と呼ばれ, それに対して構文化が生じた後に生じる構文変化は後構文化変化(post-constructionalization constructional changes; PostCxznCC)と呼ばれる。例えば量の意味を表すようになった *a lot of* に関しては音韻縮約を伴った形式である *alotta* という形が認められるが, (2)のように部分の意味を意図した場合, *alotta* という形式を用いることは認められない。このことは(3)のような量を表す新しい構文に関して後構文変化が生じたことを示しており, その結果, 独自の形式によって独自の意味を示すという特徴が強化されることとなる。このような構文変化と構文化は繰り返して起こる可能性があり, その変化が蓄積されることにより構文ネットワーク内に変化が生じることとなる。このことによって構文という考え方を基盤として言語変化を説明することが可能となる。

このような構文ネットワーク内に存在する構文間にはスキーマに基づく階層関係があり, Traugott and Trousdale (2013:16-17)は schema, subschema, micro-construction という三つのレベルを想定している。これらのうち, 最も具体性が高い個別の構文は micro-construction, そのような micro-construction の共通した性質をまとめた上位スキーマは subschema, そしてそれらの subschema に特徴した性質を更にまとめた上位スキーマは schema と呼ばれる。

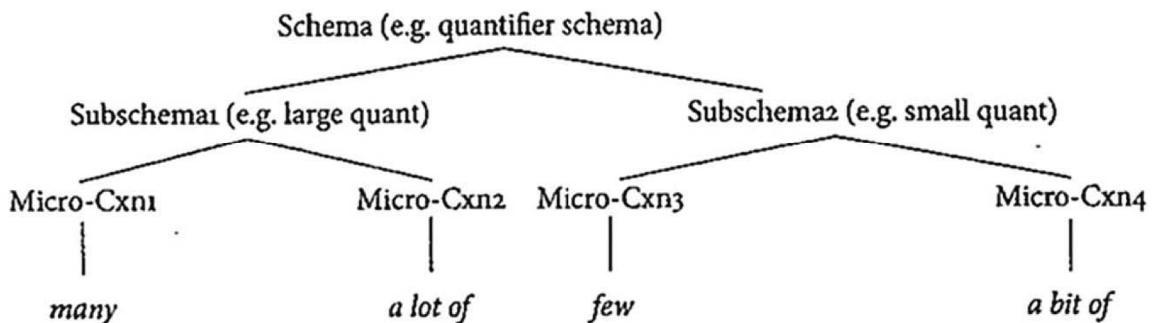


図 1 構文間における階層関係(Traugott and Trousdale 2013:17)

このような階層関係をまとめたものが図 1 である。図 1 では最も上位の Schema として量

を表す意味というスキーマがあり、このネットワークに含まれる構文は全て量を表すことになる。また、この Schema に関してはその示す量が多いのか少ないのかという意味的性質についてそれぞれ Subschema<sub>1</sub> と Subschema<sub>2</sub> が設けられている。そして各 Subschema には、Subschema が示す意味的性質を持つ Micro-construction がそれぞれ分類されるということになる。また、Micro-construction が実際の言語使用で観察された場合、そのような Micro-construction の具現化例は construct と呼ばれる。

本考察では、条件構文を Schema として位置付け、その Subschema の一つとして分類される主節述語が命令形をとる条件構文内で生じた変化について検討を進める。

### 3 現代日本語と古典日本語における条件構文と命令条件構文

#### 3.1. 条件構文とネットワーク

条件構文については様々な言語について、多くの分析がなされており、その意味・機能とそれに対応する形式に関して考察が進められてきた。Dancygier (1993) は、英語の条件構文が示す形式的かつ意味・機能的特徴として、第一に if が文中に生起しており、その作用域内では非断定的な想定がなされていること、そして, if p, then q という従属節と主節という形式から構成されること、また、その従属節と主節には意味的もしくは語用論的な関係が存在しており、主節に示される内容を断言(assert)するにあたっては、p に示される前提が不可欠であると述べている。

本考察は日本語における条件構文を定義するにあたって、Dancygier の定義における if に相当する要素として「ば」「たら」の接続助詞を想定し、そのような接続助詞によって接続される従属節と主節の間には特定の意味・語用論的関係が存在していると考える。これを構文ネットワークに位置付けると、それぞれの接続助詞を含む構文は micro-construction として位置付けられ、それらの micro-construction から抽出される条件構文 Schema の示す性質として従属節と主節から成立していること、特定の接続助詞を含むこと、また、その意味・機能的性質として特定の意味・語用論的関係が従属節と主節の間に存在し、主節に示される内容は従属節事態を前提として生じているということになる。また、その Subschema として位置付けられる主節述語として命令形をとり、命令の意味を示す性質を持つ構文(条件命令構文)が本考察の考察対象となる

#### 3.2. 現代日本語における命令条件構文

本考察で考察対象となる構文は、接続助詞「ば」を含むものと「たら」を含むものである。ここでは前者をバ条件構文、後者をタラ条件構文とする。既に(1ab)で見たように現代日本語のバ条件構文についてはタラ条件構文に表現可能な内容を表すことが出来ない場合がある。このような制約に関しては多くの考察(国立国語研究所 196 など)が指摘しており、そこには主節述語の形式と従属節が表す概念内容が大きく関連していることがわかっている。まず、バ条件構文について主節述語が命令形をとる場合、その容認性の低下が認められる。

(1a)がそのような例に該当する。主節述語の命令形が容認性の低下を招く要因となっていることは、(4a)のように主節述語が予測を表す「かもしれない」という形式をとる場合、容認性の低下が見られないことからも明らかである。

- (4) a. 学校に行けば、あの子に会うかもしれない。
- b. 学校に行ったら、あの子に会うかもしれない。

(4ab)では従属節と主節の内容は同一であり、その違いは前者がバ条件構文、後者がタラ条件構文を具体化した表現であるという点のみにある。この場合、容認性には差は見られない。このことから主節述語が命令表現を表すことが容認性の低下に関連していると言える。

また、主節述語が命令形の場合に必ずしもバ条件構文の容認性が低下するわけではなく、そこには従属節で示される内容が状態的であるか否かという要因も関連している。

- (5) a. ??鈴木さんに会えば、この書類を渡して下さい。(ソルヴァン・前田 2005)
- b. 鈴木さんがいれば、この書類を渡して下さい。
- c. 鈴木さんがいたら、この書類を渡してください。

この場合、(5a)の従属節では「鈴木さんに会う」という動的な事態が表されており、(5b)では「鈴木さんがいる」という状態が表されているという点で違いが見られる。主節の機能としては「書類を渡す」という行為を行うように指示がなされているという点に関して共通している。(5a)の容認性が低く、(5b)の容認性が高いことを考えると、その違いとして見られる従属節の状態性の有無が容認性に関連していることが伺われる。また、(5c)のようなタラ条件構文の場合、その容認性に問題はない。

このようにバ条件構文には主節が命令述語を伴い、その従属節の内容が動的な概念を示す場合を表すことが出来ないという性質に関して、タラ条件構文と比較すると限定的な機能を示すという特徴が見られる。このような振る舞いが存在することから命令条件構文に関わる Subschema の更なる Subschema として、従属節が動的な事態を示すものと、状態を表すものを区別して設ける必要がある。ここでは、そのような前者のような Subschema を満たす命令条件構文を動的命令条件構文、後者の Subschema を満たす命令条件構文を状態命令条件構文と呼ぶ。また、各 Subschema に位置付けられる micro-construction に相当する構文はどちらかの接続助詞を含むため、該当する構文の先頭に接続助詞の形態を付加することによって接続助詞に関する形式の違いを区別する(e.g. バ状態命令条件構文)。この区別に基づいた現代日本語の条件構文のうち、バおよびタラ命令条件構文に関するネットワークは次のように表される。

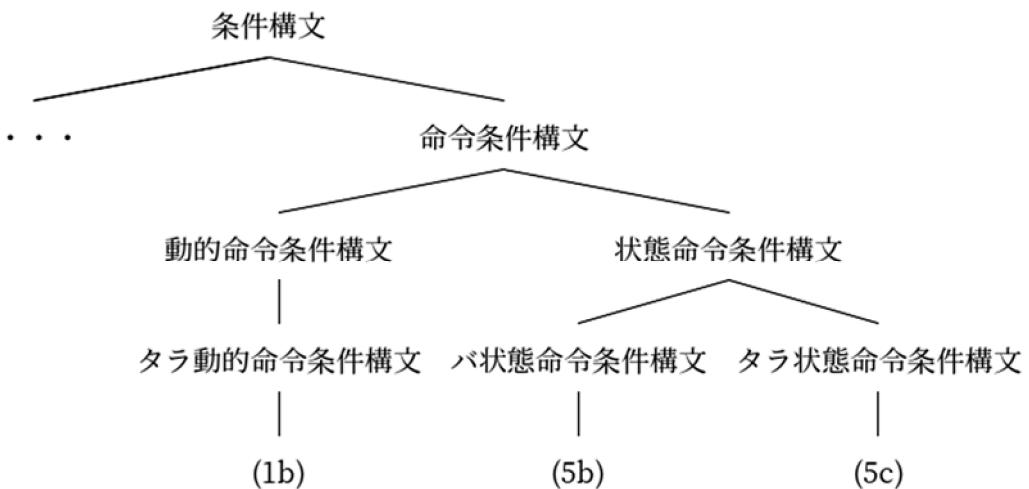


図 2 現代日本語における命令条件構文

### 3.3. 古典日本語におけるバ動的命令条件構文

前節では現代日本語で動的命令条件構文としてバ条件構文は存在しないため、そのような発話がなされた場合、そのような例の容認性は低いということを述べたが、このような特徴が通時的に一貫して存在してきたわけではなく、次のような用例が確認される時期も存在している。

(6) 今はとなく聞かせたまはば、いと忍びて渡りたまひて御覽ぜよ。(私がいよいよ望みも無くなったことをお耳になさいましたら、お忍びでお越しになってお会いくださいまし) (20-源氏 1010\_00035)

(6)は 11 世紀の用例だが、その従属節には発話者が亡くなりそうだという知らせを聞くという動的な出来事が示されており、その主節には発話者に会いに来るようという依頼が命令形述語によって示されていることから、この用例は現代日本語には見られないバ動的命令条件構文の具現例として位置付けられる。この例は動的命令条件構文のネットワーク内で特定の変化が生じたことにより、バ動的命令条件構文がネットワーク内から失われたことを示している。本考察の目的はどのような過程を経て、このような変化が生じたかという点を検討することにある。

### 3.4. 古典日本語におけるバ条件構文の中心性

古典日本語での条件構文や通時的な変化についても、現代日本語における条件構文の考察と同様に、これまでに考察がなされている(小林 1996 など)。古典日本語と現代日本語の条件構文を比較し、本考察において注目すべき性質の違いとして、古典日本語では接続助詞

である「ば」の役割が非常に大きい役割を果たしていたこと、すなわち、バ条件構文が条件構文のネットワーク内でプロトタイプ的な構文として役割を果たしていたことが指摘できる。

(7) 燕の巣くひたらば告げよ (燕が、巣を作ったら知らせよ) (20-竹取 0900\_00001)

(7)は10世紀の用例で、「燕が巣を作る」という動的事態の仮定が、従属節として提示されている例で、接続助詞の「ば」が用いられているバ条件構文の具体例である。このように、現代日本語では接続助詞として機能する「たら」が、この時期では動詞句で表現される事態の完了を表すための完了助動詞として、すなわちバ条件構文の一つの micro-construction として存在し、タラ条件構文がバ条件構文と同じ次元で想定されないという点は現代日本語と古典日本語の条件構文のネットワークを比較した際に見られる大きな違いとして挙げられる。また、このような違いはバ条件構文が条件構文の意味を表現するにあたって必要不可欠であったことを示している。3.3節と3.4節をまとめると古典日本語での特定の時期では次のような構文ネットワークが存在していたことが伺われる。

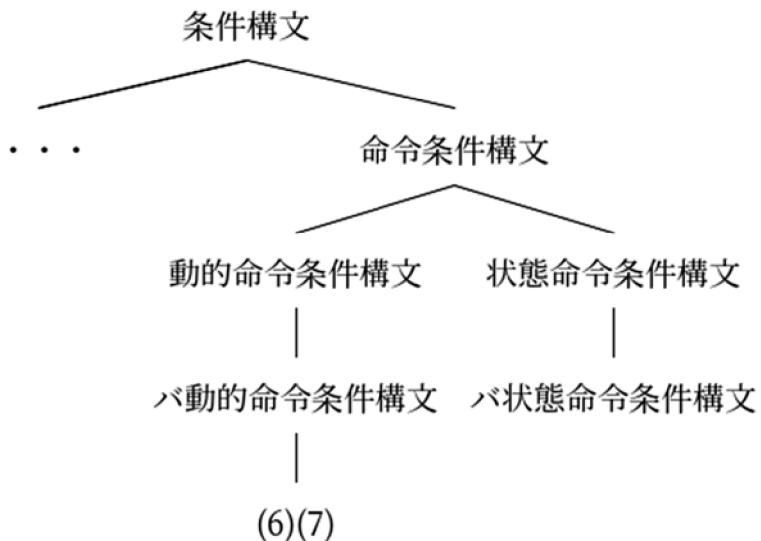


図 3 古典日本語における命令条件構文

### 3.5. 命令条件構文における従属節の性質の変化

図3と図2に見られるように古典日本語から現代日本語にかけて動的命令述語構文からバ動的条件命令構文が姿を消したという事実を説明するにあたって、バ動的条件命令構文が示していた機能が現在、どのような構文によって示されるかという点から考察を行うと、元来は、完了助動詞であった「たり」の未然形である「たら」が、現代日本語では接続助詞

の「ば」と同じような機能を保持するようになったという点は注目に値する。

動的状態命令条件構文と状態述語命令構文を用いる場合に見られる従属節の性質の違いについての考察例として瀬戸(2016)は、従属節内での「たら」の有無が従属節述語の動作性の有無と密接に関連していることが示している。すなわち、状態命令条件構文の従属節では、未然形動詞と接続助詞の「ば」が直接、接続する例が高い割合で見られること、動的命令条件構文では連用形述語と「たら」が接続し、その直後に接続助詞の「ば」が接続される用例が高頻度に見られたことを示した。また、「たら」を含む場合の頻度が通時的に増加したというコーパス調査の結果から、動的命令条件構文においてタラ命令条件構文が構文として定着し、頻度の低いバ命令条件構文は頻度効果(Bybee and Thompson 1997)によって定着度が薄れることとなり、バ動的命令条件構文は次第に用いられなくなり、結果として現代日本語ではそのような構文は容認されず、(1a)のような用例の容認性は低くなるということが論じられている。

本考察も同様に、完了助動詞であった「たら」がバ動的命令条件構文の喪失に密接に関連すると考え、タラ動的命令条件構文の頻度増加とバ動的命令条件構文の頻度低下が生じた要因に関して、多義性の解消という機能的な要因が関連すると考える。また、そのような多義性の解消によってバ命令条件構文とタラ命令条件構文の間には機能的な棲み分けが生じ、結果として図2のような現代日本語の命令条件構文ネットワークが成立したと考える。

### 3.6. 古典日本語の命令条件構文における多義性の回避と制約の発現

古典日本語のバ条件構文では従属節に示される事態について、多義性が認められる。このような多義性は現代日本語では見られず、そのような多義性の区別は、異なる接続助詞を含む条件構文によって表されるようになってい。本節ではこのような変化が多義性の解消という言語機能的な動機付けに支えられて生じたものであると論じる。

バ条件構文のうち、完了助動詞を介さずに従属節述語として動的述語が用いられる場合、その従属節が特定事態の完了を示すのか、それともそのような事態が起こるという発話者の判断もしくは特定の人物の意図の仮定を示すかという点について曖昧性が見られる。このような曖昧性については小林(1996:11)が指摘しており、前者のような意味を表すものを完了性仮定、後者のような例を非完了性仮定として分類している。

- (8) a. 花咲かば告げやらむ。  
b. 急がば廻れ。 (小林 1996)

この二つの例は、いずれも完了助動詞を介さずに述語と接続助詞の「ば」が直接接続される形式となっている。しかし、(6a)では「花が咲いた後に、そのことを知らせる」というように従属節で示される事態の完了を表すのに対して、(6b)では従属節の示す事態は完了を表さず、「急ぐ」という事態が起こるという判断を表すのみで、そこには完了的な意

味は捉えることが出来ない。このような意味は現代日本語における接続助詞の「たら」と「なら」の使い分けによって区別することが可能となっている。また、(5)のように従属節述語が完了助動詞を介して「ば」に接続される場合は古典日本語でも、完了の意味を表すことが保証されることとなる。しかし、(6a)のように、従属節事態の完了を仮定するにあたって、完了助動詞を介する義務性は古典日本語では存在しなかったと考えられる。

このように従属節で表現される事態が完了を表すか、発話者の判断を表すかが曖昧になっている状態は、言語使用の場面において支障をきたす場合がある。このような多義性が一つの形式に見られる場合、このことは聞き手に認知的な負担を課す場合があり、異なる形式を用いることによってその状況を回避するという状況が言語変化の一つの動機として存在することがある(Hopper and Traugott 2003:72)。このことは発話内容を明確にするという様態の公理(maxim of manner; Grice 1975)を守るための方策として考えられる。そのため、(6ab)に見られるようなバ条件構文の多義性を異なる形式を用いることで解消することは言語使用場面での意思疎通を円滑にする働きがあり、そのことによってバ条件構文の従属節が示す内容に対応して複数の形式が使い分けられるようになったと考えられる。

また、曖昧性を回避し、言語使用上のやり取りを円滑に進めるという点が命令条件構文に関しては特に強く機能した可能性が考えられる。これは命令という行為が必然的に発話者と聞き手を含むものであるため、意図される内容をより明確にする必要があること、そして、命令という発話行為の誠実性条件(sincerity condition)として発話者はその命令内容として表現される行為の実現を望んでいることが前提となっている(cf. 久保 2010)。このような願望は発話者の利益に直結していることから、発話者はその発話内容をより明確にすることで、自身の願望が円滑に達成しようとする考えられる。発話者が望む行為を聞き手が行うにあたって、当該の行為をいつ行うべきかという情報は聞き手にとって必要不可欠な情報である。また、発話者にとっても自分自身が望んでいる行為の達成もその実行のタイミングを聞き手が間違えた場合、かえってそのことによって発話者が不利益を被る場合が考えられる。このような状況から命令条件構文においてその多義性を解消することは重要である。このことに動機付けられて命令条件構文の従属節では完了助動詞を使用することで、命令によって指示される行為が従属節事態の完了後になされるべきことを示すと言語手段が用いられるようになる。それに対して、完了助動詞を従属節内に含まずに表現することは、従属節に示される状況が存在していると確認される場合、もしくは従属節に表される事態を行う意志や予定が存在する場合に、命令の対象となる行為を実行することを要求するということになる。そのような動機付けによって、動的命令条件構文では完了助動詞を含むものが多く用いられ、状態命令条件構文では完了助動詞を含まないものが好まれる傾向が見られたという説明が可能である。その結果、各々の意味と形式の関連性が強まることとなり、次第にバ動的命令条件構文において完了助動詞を含まないものは使用頻度が低下することになる。使用頻度の低い micro-construction については、次第にその micro-construction と上位の subschema との間の繋がりが消失することがある

(Traugott and Trousdale 2013:68)が、動的命令条件構文とバ動的命令条件構文でもこのような状況が生じ、動的命令条件構文で完了助動詞を含まないバ動的命令条件構文は頻度が低下し、結果としてこの動的命令条件構文の成員としてみなされないようになる。そのため、現代日本語では(1a)のような用例は動的命令条件構文として認可されず、容認性が低下したと考えられる。このように多義性の解消という要因が動機付けとして働き、バ動的命令条件構文のうち、従属節述語と「ば」の間に完了助動詞が表されないものは、容認性が低下し、現代日本語において容認されない用例へと変化したと考えられる。

## 4 結論

本考察では、Traugott and Trousdale(2013)による構文化・構文変化の考えに基づき、現代日本語において(1a)に見られるようなバ条件構文の使用制約が存在する要因を動的命令条件構文という Subschema の構成の変化という観点から考察を行った。その結果、そのような Subschema の構成的な変化では、バ動的命令条件構文という micro-construction の示す従属節の多義性を解消するという認知的方策が関連していたことと、その過程で、接続助詞の「たり」の未然形を含むバ命令条件構文がその多義性を解消するにあたって大きな役割を果たしたことを見た。また、そのような micro-construction が命令条件構文 subschema と関連性を強化することにより、バ動的命令条件構文との繋がりが薄れ、結果として容認性が低下し、現代日本語のバ条件構文における使用制約へと繋がっていることを示した。

## 参考文献

- Bybee, J., & Thompson, S. (1997). Three frequency effects in syntax. In *Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 23(1), pp. 378-388.
- Dancygier, B. (1993). Interpreting conditionals: Time, knowledge, and causation. *Journal of Pragmatics*, 19(5), 403-434.
- Goldberg, A. E. (1995). *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. University of Chicago Press.
- Goldberg, A. E. (2006). *Constructions at work: The nature of generalization in language*. Oxford University Press.
- Grice, H. P. (1975). Logic and Conversation. In P. Cole & J. L. Morgan (ed.), *Syntax and Semantics: Vol. 3: Speech Acts*, pp. 41-58. Academic Press.
- Hopper, P. J., & Traugott, E. C. (2003). *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 小林賢次. (1996). 日本語条件表現史の研究. ひつじ書房.
- 国立国語研究所. (1964). 現代雑誌九十種の用語用字: 第3分冊(分析). 秀英出版.
- 国立国語研究所. (2018). 日本語歴史コーパス. バージョン 2018.3 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>
- 久保進. (2010). 言語行為と発語内行為. 澤田治美・高見健一(編), ことばの意味と使用-日英語のダイナミズム-, pp. 234-245. 凤書房.
- 瀬戸義隆. (2017). 現代日本語における「ば」の接続制約創出. 日本認知言語学会論文集 vol.17, 198-210.
- ソルヴァン・ハリー, 前田直子. (2005). 『と』『ば』『たら』『なら』再考. 日本語教育, 125, pp.28-37.
- Traugott, E. C., & Trousdale, G. (2013). *Constructionalization and constructional changes*. Oxford University Press.,